軍事反乱の危機を防いだ韓国②

村山俊夫　（ソウル在住）

最後の「談話」

12月12日。弾劾採決まで2日。この日は今から45年前に保安司令官だった全斗煥（チョン・ドゥファン）がクーデターを起こして実質的に国家権力を掌握した日だ。軍人など関係者の証言が続く中、与党・「国民の力」代表のハン・ドンフンが「大統領は早期退陣要請に応じる考えがないことが確認された。弾劾によって大統領の職務執行停止することが民主主義と共和国制を守るための唯一の方法だと考える」と弾劾賛成意思を遅きに失した感はあるが表明した。この日までに与党議員でありながら「弾劾賛成」を表明した議員が7名に上ったが、ハン代表の一言で弾劾賛成に投票する与党議員がさらに増えて弾劾訴追案は可決される可能性が高くなっている。これまで党議として弾劾反対を決め、議決ボイコットの方針を持ってきた与党だったが、院内代表のチュ・ギョンホの辞退を受けて選出されたクォン・ソンドンも「党議として弾劾反対を決めたがそれを議員に強制することはできない」と「自由投票」になることを示唆した。

午前9時42分、尹錫悦が再び「国民談話」を発表したが、前回今後の進退問題などは与党に一任するという談話が2分足らずだったのに比べると29分という長い時間をかけてスピーチを行ったのは大きな変化だった。

その中で尹錫悦は野党を強く非難し、戒厳令を宣布した理由と北朝鮮のハッキングによる不正選挙の疑惑について説明した。弾劾をめぐる野党の行動を「狂乱の剣舞」とまがまがしい言葉と詭弁に満ちた内容で批判する一方、12・3クーデターを「司法審査の対象にならない大統領の統治行為」と表現して大統領職を辞退する考えは全くないことを表明した。

これに対し中央選挙管理委員会はただちに見解を発表し、「北朝鮮のハッキングによる選挙システムの侵害行為は発見されなかった」「万一ハッキングの可能性があ

るとしても現実に不正選挙につながることはない」とし、「不正選挙に対する強い疑惑の提起をするなら本人が大統領に当選した選挙管理システムへの自己否定となるだろう」と大統領の疑惑提起を強く批判しこれに対する法的措置を取ることを改めて要求すると述べた。

法律案、大統領令など42件裁可

尹錫悦は国務会議を通過した法律案及び大統領令（施行令）42件を裁可した。彼は12月7日の対国民談話で「今後国政運営はわが党と政府がともに責任を持って推進する」と一線から引き下がるような発言をしたが、12月8日、イ・サンミン行政安全部長官の免職を裁可したのに続き、12月11日には非常戒厳に反発して辞表を出したリュ・ヒョク法務部監察官の免職を裁可するなど相次いで人事権を行使した。

これは大統領職を維持し国政運営にも関与していくという意思として解釈できる。軍の統帥権もいまだに尹錫悦に残されたままだ。

野党6党、第二次弾劾訴追案提出

<共に民主党>、<祖国革新党>、<改革新党>、<進歩党>、<基本所得党>、<社会民主党>など野党6党が大統領 尹錫悦に対する第二次弾劾訴追案を国会に提出した。訴追案は尹錫悦が法律に違背し非常戒厳を宣布して軍、警察を動員し国会を封鎖、侵入したのち憲法の定めた機関である国会の戒厳解除要求権の行使を妨害するなど、国会の活動を抑圧した。同様に憲法の定めた機関である中央選挙管理委員会にも威圧的な方法で不法侵入したばかりか国会議員、政治家、言論人などの違法逮捕を試みたことから、こうした行為が自由民主的な基本秩序を脅かす行為として被訴追者である尹錫悦が大統領職から罷免されることによって憲法秩序を回復するために弾劾訴追案を発議すると記した。

一方で曹国元法相、現<祖国革新党>代表に対し、子女の入試不正などの容疑でこの日、大法院（最高裁）で懲役2年の実刑判決が確定し、議員職のはく奪と、今後5年間被選挙権も喪失した。これは大統領選挙に立候補が不可能になったことを意味する。弾劾訴追に関連しては、野党議員が1名減ることで与党からの賛成票がさらに1票必要になると思われたが、祖国革新党内から比例代表のペク・ソンヒが繰り上げ当選者として1名補充されたため野党議員数は変わらず、弾劾の行方は与党内の離脱票、つまり党の方針に反して弾劾賛成票が何票出るかにかかっていた。

運命の12月14日

午前中、与党は議員総会を開いて弾劾決議にどう臨むかについて討議を続けた。党

内には弾劾賛成を強く主張するハン・ドンフン代表と彼を支持するグループと、弾劾を強力に非難するユン・サンヒョンをはじめ「親尹派」と自他共に認めるクォン・ソンドンなどが鋭く対立しているためその帰趨は予断を許さないものとなった。弾劾訴追案の議決を30分後に控えた3時半現在も与党の議員総会は結論を出せず続いていた。

その間に首都防衛司令官（兵力の国会投入指揮者）逮捕、警察庁長官　チョ・ジホ、ソウル市警察庁長　キム・ボンシク　2名を拘束（チョ・ジホは出頭する時手錠をかけられた姿だった）など捜査の進展も伝えられている。肝心の「大統領緊急逮捕」はもしあるとしても、早くて来週だというが、察や検察、特別検察などが検事出身の大統領をどこまで客観的に捜査ができるかが鍵となるだろう。

一方国会前には3時から予定されている弾劾可決要求国民大会に参加する市民、労働者、学生が昼前から続々と集結しつつあった。1週間前に目の前で弾劾訴追案が否決された瞬間の虚脱感はもう、国会前の道路や公園、ビルの狭間の路地までびっしり埋めつくし国会議事堂を見つめる人々のまなざしには見られなかった。

「権力者の国政壟断を許さない」と、数百万の人が大統領を権力の座から引きずりおろした8年前のキャンドル革命が思い浮かぶ。しかし今回の市民の行動について報道では「若者たちがK-POPコンサートに熱狂するようにペンライトを振りながら大統領弾劾を叫んでいる」様子は、悲壮感ではなくこの場を祝祭のように楽しんでいるように見えると伝えられた。

もう一つ新しい現象として「前払いカフェ」「前払い食堂」と呼ばれる無料カフェや食堂が、集会場の近くにオープンして寒さに震える参加者に温かい気持ちを分かちあっていた。これは店の方で無料サービスをしているのではなく、弾劾要求集会を応援する人が「コーヒー100杯分」「ホットパック500個分」などをそれぞれの店にあらかじめ支払い、参加者は「前払いカフェ」の張り紙がある店に行って熱いコーヒーを無料で提供してもらうというシステムだ。この試みには芸能人も加わって、日本でもよく知られる歌手のアイユーはパン200個、飲み物200杯、餅100個、クッパ300杯を「前払い」したことが伝えられている。

政治的な面からみても、キャンドル革命と共通した場面もあるが、「朴槿恵退陣」を叫んだときは大統領に向けられた怒りが爆発し、大統領府のある光化門に人々の行動が集中したが、今回は弾劾決議が行われる国会に向けられている。これは民主主義のシステムの中核的役割を果たす国会に、主権者である国民が自らの意思を反映させようとする強い意志が示されたものと見ることができる。そして尹錫悦とい

う特異なキャラクターを持つ指導者を審判するのは、あくまでも国民の認める正当な手続きに基づいて国会がその役割を果たすことを選択したことを示した。8年の間に韓国の民主主義はさらに成熟したといえるだろう。

午後4時。国会は全世界が注視しすべての国民が息を詰めて見守る中、ついにその時を迎えた。与党の議員総会の進行が遅れたため、開会は予定を20分ほど過ぎて始まった。投票に先立って<共に民主党>院内代表のパク・チャンデ議員から議案説明が行われた。内容は先にノーベル文学賞を受賞した作家ハン・ガンの「少年が来る」を引用しながら「現在が過去に助力することができるか」「生き残った者が死者を救うことができるという問いを逆転させなければならないことを悟った」といささか文学的な言葉から始めた。それは1980年5月の光州のできごとが、2024年12月のできごとを恐怖の時間から救い出した、つまり市民は悲劇の過去を繰り返さないことを歴史から学ぶことができたと言おうとしたようだった。説明が終わるとただちに投票が始まった。国会前に集まった人々も息を殺してその状況を見守った。在籍国会議員300名が全員投票に参加したことが確認された。結果は…最低必要賛成票を上回って204票の賛成によって弾劾訴追案が可決された！

戒厳令が解除されてから、毎日冷気の覆う歩道を怒りのこぶしを突きあげながら行進し続けた市民の切実な思いが勝利をたぐり寄せた。もはや極右勢力の代弁人と化した尹錫悦の「反国家勢力を処断する」「支持者と共に最後まで戦う」という脅しをものともせず、驚くべき速度で最大のリスクを除去することに成功した。それは同時に危機に面した南北関係、均整のとれた外交、健全な経済と内政の安定を取り戻すための困難な一歩の始まりでもあるだろう。これまで大統領の擁護にのみ必死になり国民の願いに背を向けて来た「国民の力」という政党の解散を求める声が強く沸き起こっていた。弾劾の審議はこれから憲法裁判所で始まる。解決すべき課題は決して易しくはないが、歴史から学ぶすべを知る韓国市民は必ず乗り越えていくと信じたい。

夜7時過ぎ、弾劾議決書が大統領室に正式に伝えられた。この瞬間、尹大統領のすべての職務が停止された。

（12月12日記）